

双生児における「移行対象」の特徴について

Characteristics of Twins' "Transitional Objects"

布施 晴美
Harumi FUSE

【要旨】

本研究は、双生児の「移行対象」出現の特徴について、単胎児と比較して明らかにすることを目的に、質問紙調査を実施した。質問紙は、1～7歳の双生児の母親76名を対象に郵送し、44名の回答を得た（回収率57.9%）。双生児の「移行対象」の出現率は53.4%となり、日本における単胎児の出現率31.7%よりも割合が多かった。1対1で母親が育児の対応をすることが難しい双生児の分離不安等を、双生児が「移行対象」によって軽減させる手段としていることが示された。「移行対象」出現に卵性による差は認められず、性差については有意に女兒の方が出現の割合が高く、これは単胎児と同じ結果となった。移行対象物の種類、一次的移行対象と二次的移行対象の出現状況等についても、単胎児も双生児も同じ特徴を有していた。「移行対象」をめぐる双生児の関係性においては、互いの「移行対象」の大切さを認識している双生児が多かった。「移行対象」についてはどの母親も肯定的に受け入れており、「移行対象」の存在は、母親の育児を支える役割を果たしていた。

【背景】

幼児が生活の中でいつも身近に置き、それがないと著しく不安になる毛布・ぬいぐるみなどの無生物をウィニコット（Winnicott, D. W.）は「移行対象（transitional object）」とよび、子どもが成長する過程で分離不安に対する防衛手段として存在すると説明している（井原、2009）。「移行対象」の存在を受けて、アンナ・フロイトは、「移行対象」には、①母親の身体の持つ感触が置き換えられたものが選ばれる段階と、②柔らかいオモ

チャが、象徴的な対象として選ばれる段階という2段階があると述べており、井原（2009）は、前者を感覚的に関わる段階、後者を人格的に関わる段階（対象が人格化され人間的な感情が投影されるようになる段階）と述べている。さらにブッシュが、感覚的に関わる段階を一次的移行対象、人格的に関わる段階を二次的移行対象として、その特徴を表1のように示した（井原、2009）。

移行対象の特徴として、柔らかい・肌触りがいい・暖かい、においがあげられる。この「柔らか

表1 移行対象の2段階 (Busch, 1973)

一次的移行対象	① 1歳までに出現する ② 1年間以上継続する ③ 不安を静止sootheするもの（落ち着かせ慰めるもの）である ④ 哺乳瓶やオシャブリなど口唇愛的oral libidinalなものでない ⑤ 子どもによって発見され、選ばれたものである ⑥ 子ども自身あるいは母親の身体は含まれていない
二次的移行対象	1歳～2歳の間に現れるやわらかいおもちゃである

い・肌触りがいい・暖かい」は、優しさと安心に満ちた母親に抱かれた状態と類似していることから子どもに一体感を与える理想の母親の代理物だと考えられている。「におい」はその子どもにとっては、物ではなくもうひとりの自分・分身だと考えるためであるという（井原、2009）。

日本における「移行対象」の出現率は、31.1%（藤井、1985）、38.0%（遠藤、1990）、31.7%（井原・汪・庄司、1997）と、概ね3割程度と報告されている。外国での「移行対象」の出現率について、欧米（アメリカ）では53.9%、韓国では18.3%、中国では16.5%と報告されている（井原、2009）。これらの差異は育児手法や環境による影響が考えられるが、いずれも単胎児を対象とした調査である。

さらに、「移行対象」の出現について、母親の養育意識との関連として、移行対象有群の方が、有意に育児に伴う心理的葛藤を覚えやすいという結果を遠藤（1990）は報告している。育児に伴う心理的葛藤の質問項目として、育児のために母親のやりたいことが制限されることに対する思い、育児から解放されたいという思い、育児が大変で赤ちゃんがいらない方がいいと思ったこと、等があり、単胎児の母親を対象とした調査であった。双生児育児の中で家族（主に母親）の身体的・精神的負担については、大木（2014）や天羽（2014）、片山・内藤（2011）ら多くの研究者が単胎児育児よりもはるかに負担が大きいことを指摘している。このことから双生児は「移行対象」の出現率が単胎児より高くなることが考えられる。また、双生児育児については母親が同時に二人の赤ちゃんの世話を展開する中で、二人を同時に抱

くことの難しさがあり、そのため双生児は母親に抱かれた状態と類似している「移行対象」を単胎児より欲する可能性が高いことも予想できる。

そこで本研究では、双生児の「移行対象」について、出現率および「移行対象」をめぐる双生児の関係性について探り、双生児の「移行対象」の特徴について明らかにすることとした。

【研究目的】

出生後からずっと傍らに相方がいる双生児の「移行対象」について、「移行対象」の出現率および「移行対象」をめぐる双生児の関係性について探り、単胎児と比べて双生児の「移行対象」にどのような特徴があるのか明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 調査対象および調査時期

1歳から7歳までの双生児の子どもの母親76名を対象に、ツインマザーズクラブの協力を得て、平成26年8月および平成27年3月に調査を実施した。ツインマザーズクラブとは、日本全国の多胎児の母親を会員とした非営利団体であり、多胎児に関する調査研究の協力も会則に盛り込まれている組織である。

2. 調査方法および手続き

郵送法による無記名の質問紙調査を実施した。郵送の調査を実施するにあたって、あらかじめツインマザーズクラブの会報で調査の実施について

予告したのち、ツインマザースクラブの封筒を用いて郵送した。郵送に使用した住所のラベルは、郵送時に使用し、手元には残らないようにした。調査の同意については、質問紙調査の回答の返送をもって同意とした。

3. 調査内容

調査内容は、双生児の属性（年齢・性別・卵性、性格・他の兄弟の有無）に関する選択回答、及び「移行対象」に関して、「移行対象」の存在の有無、出現時期、存在期間、「移行対象」の種類、「移行対象」をめぐる双生児の関係性、移行対象にまつわるエピソード等について、記述を求めた。

「移行対象」については、幼児が肌身離さず持ち歩くもので、それがないとひどく不安になるものを指し、人形、ぬいぐるみ、毛布、タオルなどの無生物を「移行対象」というと定義し、回答を求めた。

4. 倫理的配慮

本調査は、ツインマザースクラブ事務局の承認および十文字学園女子大学研究倫理委員会の承認（2014年）を得て実施した。

【結果と考察】

1. 対象の属性について

質問紙は44名の母親から回答を得た（回収率57.9%）。

回答者（母親）の双生児の子どもの年齢の内訳は、1歳3名（6.8%）、2歳16名（36.4%）、3歳10名（22.7%）、4歳7名（15.9%）、5歳8名（18.2%）であった。また、双生児の卵性および性別については、一卵性双生児18組（40.9%）、二卵性双生児26組（59.1%）であり、性別の組み合わせは、男児・男児が18組（40.9%）、女児・女児が15組（34.1%）、男児・女児が11組（25.0%）であった。

2. 双生児の「移行対象」の出現率と卵性・性差

双生児44組（88人）について、移行対象「有」が47人（53.4%）、「無」が41人（46.6%）であった（図1）。「移行対象」を双生児二人ともが持っていたのが20組、1人だけ持っていたのが7組、二人とも持っていなかったのが17組であった。「移行対象」の有無と双生児の卵性・性別との関係を図2、図3、および表2に示した。「移行対象」の有無と双生児の卵性・性別との関係についてそれぞれ χ^2 検定を行った結果、卵性との関係においては、有意な差は認められなかった（ $\chi^2(1) = .010$, n.s.）。性別との関係においては、有意な差が認められ（ $\chi^2(1) = 4.778$, $p < .05$ ）、女児に「移行対象」が現れやすい傾向が示された。

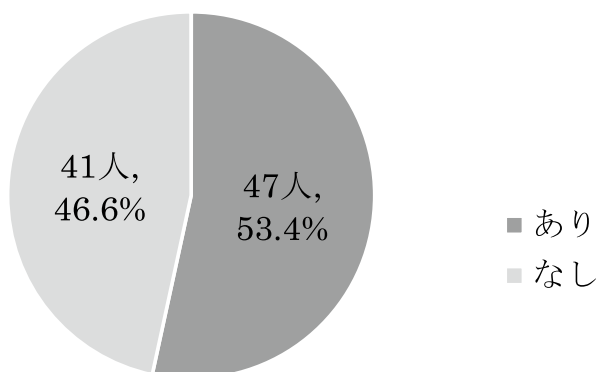


図1 双生児の移行対象の出現率 (n=88人)

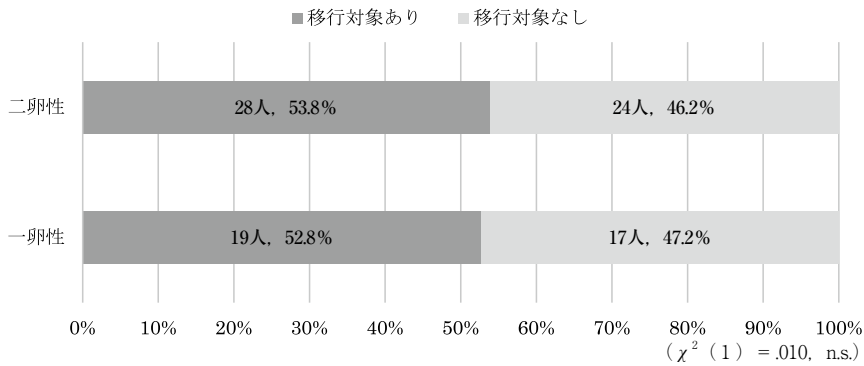


図2 移行対象の有無と卵性との関係 (n=88人)

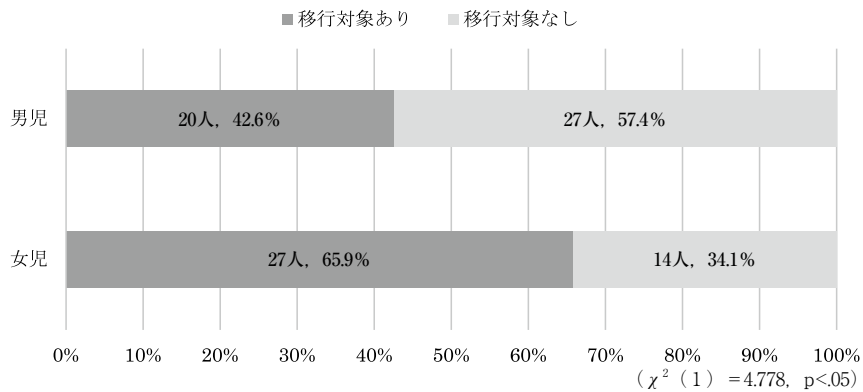


図3 移行対象の有無と性別との関係 (n=88人)

表2 「移行対象」の有無と卵性・性別との関係 (n=44組)

	移行対象 2人ともあり	移行対象 1人だけあり	移行対象 2人ともなし	合計
一卵性：女兒・女兒	6	1	2	9
二卵性：女兒・女兒	4	0	2	6
一卵性：男児・男児	2	2	5	9
二卵性：男児・男児	2	3	4	9
二卵性：男児・女兒	6	1 (男児)	4	11
合計	20 (45.5%)	7 (15.9%)	17 (38.6%)	44 (100%)

「移行対象」の出現率については、本調査での回答者のみの結果から算出すると53.4%となり、藤井 (1985)、遠藤 (1990)、井原ら (1997) が示している単胎児 (日本) の出現率31.1%、38.0%、31.7%と比べて大きく上回っていた。本調査のデータは、欧米の53.9% (井原, 2009) とほぼ等しい結果となった。欧米の子育ては、添い寝などの母子の接触や密着を重視しつつ自立を促す日本の子育てと比べ、母子が別室で寝るなどといった自立を促す子育てを促している。別室で寝

ていることにより、抱っこしてほしい、あやしてほしいといった子どものニーズに速やかに応じることができずに、子どもは対応を待たされてしまう場合がある。このような点が、双生児の育児の中で、1人のニーズの世話に追われている時に、もう1人のニーズに速やかに答えることができずに、対応を待たされる場合があるという点で類似しているといえよう。双生児にとって母親との直接的な接触が速やかに果たされず待たされている際に、母親に代わるものとして「移行対象」の存

在が子どもの精神安定をもたらすものととらえることができる。

また、異年齢の同胞との出現率について遠藤（1991）の研究では、長子に移行対象を経験している場合は、次子も移行対象を経験する（61.7%）、長子を経験していなければ次子も経験しない（80.9%）という比率がともに高いことを示していた。本調査の双生児の出現率にあてはめて「移行対象」が1人あるいは2人ともに出現している組み合わせに注目して算出すると、27人（27組）中20人となり、74.1%とかなり高い値となる。さらに遠藤（1991）は、長子と次子の出生間隔が近いほど「移行対象」の発現率が高くなることに有意な関連を示していた。短期間のうちに二人の子どもを養育しなくてはならない母親の負担は、そうでない場合に比してより大きいと述べられており、双生児の育児負担と「移行対象」の出現の関連性を支持しているものといえる。

双生児の「移行対象」の出現率は、卵性による差は認められず、同年齢の乳幼児が2人いるということが、母親の育児負担を助長し、「移行対象」の出現率の増加につながっている。「移行対象」の出現について遠藤（1990）も、母親の何らかの心理特性、養育観、養育スタイル等がより関与しているという見方が妥当と述べている。単胎児と比べて双生児に「移行対象」の出現が高いことについては、単胎児の育児スタイルと双生児の育児スタイルの違いが「移行対象」の出現に影響を与

えていると考えることができる。それは双生児の片方だけに移行対象が現れている割合が少ないことから、推測できる。

さらに「移行対象」の出現を性別の割合でみると、本研究では「移行対象」のある男児は47人中20人（42.6%）、「移行対象」のある女児は41人中27人（65.9%）となり、女児の方が有意に「移行対象」の出現が多い結果となった。単胎児を対象とした「移行対象」の男女別による出現率は、女児の出現率（43.9%）が男児の出現率（32.8%）より有意に大きい（遠藤、1991）という報告があり、双生児についても性差による影響は、単胎児の結果と一致しているという結論を得ることができた。

3. 双生児の「移行対象」の出現時期と「移行対象」の種類と変化

「移行対象」の出現時期は、乳児期（「気が付いたら」も含む）が17人、1歳（「1歳前後」も含む）が22人、2歳が8人であった（図4）。

双生児の2人ともが「移行対象」を有している20組について、その出現時期については、13組は同じ時期であり、乳児期が5組、1歳が7組、2歳が1組であった。出現時期が異なっていたのは7組で、先行した子どもの年齢は、乳児期が1組、1歳が5組、2歳が1組であった。移行対象物の類似性については、2人とも同時期に移行対象が出現した13組の中で、11組がほぼ同じもの、

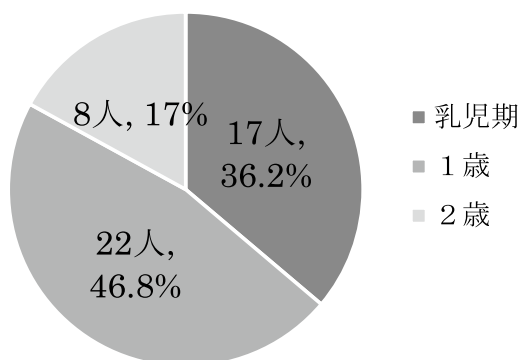


図4 移行対象出現時期 (n=47人)

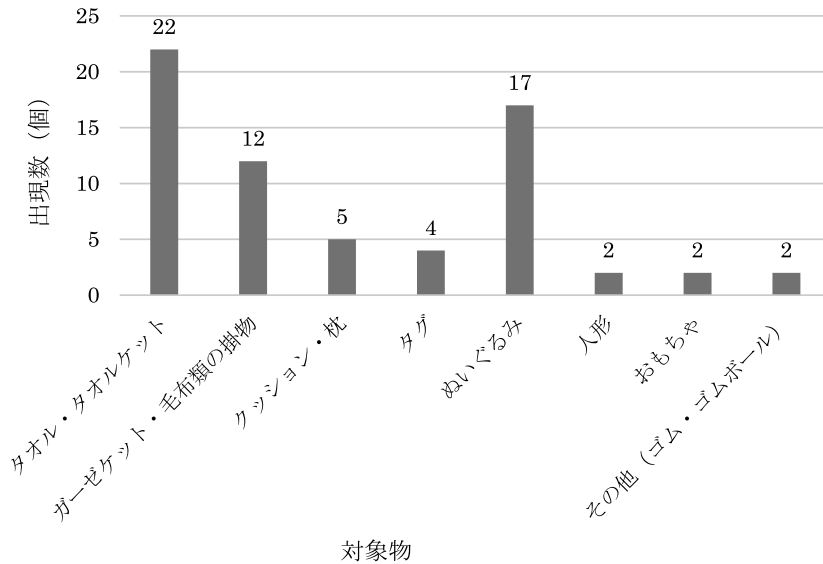


図5 双生児の移行対象の種類

2組が異なるものであった。その2組の異なる対象物については、1人がタオル、もう1人がぬいぐるみという組み合わせと、1人がドーナツ枕、もう1人がおくるみ、という組み合わせであった。出現時期が異なっていた7組の移行対象物の類似性については、5組が先行して出現した移行対象物と同じものになっていた。時間差の期間については、3～6か月が5組であった。

47人の移行対象の種類について図5に示した。移行対象物の全出現個数66個のうち、最も出現個数が多かったのが、「タオル・タオルケット」22個 (33.3%) で、次いで「ぬいぐるみ」17個 (25.8%)、「ガーゼケット・毛布など掛け布団や掛物」12個 (18.2%) となっていた。「母親の髪をしばるゴム」と「ゴムボール」をその他に含め

た。「ゴムボール」については、おもちゃとして遊ぶというよりは、手に持っているという扱いから、「おもちゃ」とは区別し、その他として分類した。

「移行対象」の種類については、井原 (2009) が実施した調査で「うちの子の手放せないもの」として、タオル・タオルケットが最も多く、次いで、ぬいぐるみ、毛布・布団と上げており、類似した結果となった。

「移行対象」についてさらに「一次的移行対象」「二次的移行対象」で分け、出現時期別に分類したものを表3に示した。富田 (2007) の分類を参考に、「一次的移行対象」をタオル・毛布・ガーゼケット類、クッション、枕、タグ、「二次的移行対象」をぬいぐるみ、人形、おもちゃ、に分類

表3 出現時期別における移行対象物の種類と個数 (n=66個)

	一次的移行対象	二次的移行対象	その他	計
0歳 (含: 気づいたら)	11	6		17
1歳 (含: 1歳前後)	21	4		25
2歳	8	11	2	21
3歳	2	0		2
4歳	1	0		1
計	43	21	2	66

表4 移行対象の1人当たりの個数 (n=47人)

移行対象物の個数	人数
1個 (変化なし)	30 (63.8%)
2個	15 (31.9%)
* 変化あり	7
* 2個とも継続	8
3個	2 (4.3%)
* 1個は継続	1
* 3個とも継続	1

した。

一次的移行対象は生後7～12ヶ月頃に愛着が生じ、接触欲求や分離不安などとの関係において重要な役割を果たすのに対し、二次的移行対象は2、3歳頃に愛着が生じ、自律性や自立などとの関係において重要な役割を果たすと、Hong (1978) は述べている (井原, 2009)。本結果では、0歳、1歳の一次的移行対象を占める割合が74.4% (43個中32個) と高く、二次的移行対象は2歳になると増加 (21個中11個、52.4%) してきており、Hong (1978) の主張とほぼ一致した傾向がみられた。ただし、ここではぬいぐるみを二次的移行対象に含めて分類したが、ぬいぐるみは布製で温かな触り心地の素材から、乳児から1歳時には「遊びの対象」と考えるよりは、慰めの役割を果たしているものととらえることもできる。そうすると、一層、0～1歳は一次移行対象、2～3歳は二次移行対象の出現が顕著になる。遠藤 (1990) が示した「移行対象」の出現時期及び対象物について示した結果の中で、生後15か月までの移行対象に布類 (ぬいぐるみ・玩具等以外のもの) が占める割合が79.4%と述べられており、本結果も0歳、1歳の移行対象物42個中32個 (76.2%) がぬいぐるみ・玩具等以外のものなり、同じ傾向が示された。このことから単胎児と双生児で特に違いは見られないと判断できた。

「移行対象」は1つのものを継続している子どももいる一方で、移行対象物が別なものに変わる子どもや、あるいは、移行対象物が増えてきている子どももいる。「移行対象」について、1人当

りの個数を示したものが、表4である。1、2歳の子どもの調査対象になっているため、その子どもたちに今後「移行対象」に変化が生じる可能性があり、確定的なものではないが、半数以上の子どもの移行対象は1個であった。一方で約3割が、2個以上の移行対象を持っていることが示された。移行対象の個数の先行研究がないため単胎児と比較することはできないが、2個以上の移行対象を持つ子どもは、一次的移行対象から二次的移行対象へと変化している子どもが多いことわかった。

4. 「移行対象」になっていくきっかけ

「移行対象」について、どのようなきっかけで現れるようになったのか、母親が考える「移行対象」に選ばれた理由に関する回答 (自由記述) を分類し、表5にまとめた。分類は、「寝るとき・布団代わり」、手触りや自分で選んだといった「対象物の魅力」、近くにあった「近接性」、「遊び相手」、生まれたときから〇〇していた「先行する習慣」、落ち着くといった「情緒安定性」、祖父母からプレゼントされたといった「プレゼント」、相手が持っていたから自分も欲しくなったといった「双生児の片方からの影響」、元々は親が使用した「親のもの」兄・姉が持っていた「兄・姉からの影響」、の10項目にした。

表5 「移行対象」に選出された理由・きっかけ (n=47人)

移行対象の出現理由・きっかけ	人数	%
寝るとき・布団の代わり	24	51.1
対象物の魅力	12	25.5
近接性	10	21.3
遊び相手	9	19.1
先行する習慣	7	14.9
情緒安定性	7	14.9
プレゼント	6	12.8
双生児の片方からの影響	5	10.6
親の物	4	8.5
兄・姉からの働きかけ	2	4.3

表5については、あくまでも母親の解釈による選出理由・きっかけである。以下にいくつかのケースを紹介する。波線部は各項目への固定箇所であり、波線の後の【 】内がその項目である。尚ケース番号の次に記すAやBは、先に生まれた方をA、後に生まれた方をBとして区別したものである。

- 〈ケース10A〉フリースのひざ掛け／秋頃から布団代わりにかけていた【寝るとき・布団代わり】
- 〈ケース19B〉くまのぬいぐるみ／毛並みの良いぬいぐるみで手触りが気に入ったよう。元々は子ども用ではなく、飾ってあったものを勝手に見つけて持ち歩くようになった【対象物の魅力】
- 〈ケース15B〉ベネッセの白いタオル・ベネッセの緑色のタオルポンチョ／近くにおいていた【近接性】
- 〈ケース5A〉ネンネの毛布／生まれたときからくるんだり、掛け布団にしていたため【先行する習慣】【寝るとき・布団代わり】
- 〈ケース5B〉ネンネの毛布／生まれたときから使用していたため【先行する習慣】【寝るとき・布団代わり】
- 〈ケース10A〉床のクッション材の切れ端／Bちゃんがぐわえる様になってから真似をする。今も無いと泣く。寝るときやぐずるときは必要。【情緒安定性】【双生児の片方からの影響】

〈ケース19A〉しまじろうのぬいぐるみ／Bがクマを大切にしてお世話をしたりするのを見て真似をするようになった。執着はしていないが今もBが遊んでいるのを見ると取り出して遊んだりしている【双生児の片方からの影響】

〈ケース11A〉髪をしばるゴム／寝るときに。母親がしばっていたのをとり、持ち始めたことから【親のもの】

〈ケース1A〉犬のぬいぐるみ／兄が以前から家にあった3匹の犬のぬいぐるみを「これは○○ちゃんの～、こっちは～」とふたごに配った【兄からの働きかけ】

事例を含め、以上のことから「移行対象」が出現するきっかけについては、「寝るとき・布団代わり」が最も多いことがわかった。これは、ハーロウのアカゲザルの実験でも示されているように、移行対象が柔らかさや肌触りのよい母親のような側面を持っているからだろうと推測できる。さらに、双生児ならではの回答として「双生児の片方からの影響」があり、大変興味深い結果となった。

遠藤(1990)の報告に、「移行対象」出現と母子同床寝か別床寝か(同じ布団・ベッドに寝ているか否か)との間に、別床寝の方が「移行対象」出現率が有意大きいことが示されている。また添い寝の有無(同床、別床に関係なく子どもの入眠

時に添い寝をするか否か)との間においても、有意な関連が示されている。それは一貫して、「母親自身が添い寝」、「子がむずがる時のみ母が添い寝」、「母以外による添い寝」、「子の一人寝」の順に次第に「移行対象」発現率が大きくなるという傾向を示している。そして、「移行対象」無群はより長期にわたって添い寝が施されている傾向も示唆していた。同時に2人の子どもから求められることの多い双生児の育児では、寝るときの母親との距離感も影響を及ぼしていることが推測できた。

5. 移行対象をめぐる双生児の関係性

双生児は互いの移行対象について、どのような関心を抱いていたのかについて、表6に示した。「移行対象」をめぐる27組の双生児間関係性については、互いに対象物を大切なものと認識し取り合うことがないのが9組、相方の対象物を取りあげるなどちょっかいや気を引く場合があるのが10組、お互いの対象物に無関心が3組であった。その他として4組おり、自分のもの相手のものという認識はなく「移行対象」が入れ違っても気が付かない場合や実際には取り合いにはならないが相手に取られないようにしている場合、「移行対象」を持たない子どもが、対象物を持つ相方の真

似をして相方のものを取りあげるのではなく他の似たようなものを持ちたがる場合、などもあった。

互いの移行対象について無関心であった双生児は27組中3組のみで、互いの移行対象に何らかの関心がある、あるいはその大切さを認知している双生児が多いことがわかった。

相方にちょっかいを出したりからかうために「移行対象」の取り合いをする双生児10組について、その中で2人とも移行対象を持っている双生児が8組いた。自分自身にも「移行対象」が存在しているにもかかわらず、相方の「移行対象」に手を出すということは、相方の注意をこちらに向けたい、相方にかまってほしいという手段として「移行対象」に注目していると考えられる。遊びたいおもちゃの取り合いではなく、相方が大切にしているタオルや毛布、枕といった「移行対象」をめぐる攻防については、今後もさらに詳細に分析する必要がある。母親との関係性の中で「移行対象」は存在するものであるが、双生児の間でもその重要性が認識でき、その存在に役割があることを認識していることが見出された。

6. 母親の「移行対象」に対する受け止め

子どもたちの移行対象の出現を、母親はどのよ

表6 移行対象をめぐる双生児の関係性

移行対象をめぐる関係性		2人とも移行対象有 (20組)	1人だけ移行対象有 (7組)	合計 (27組)
【取り合い：なし】		8	1	9
内訳	相手の大切なものと理解している	7	1	8
	相手が困っている時に渡す	1	0	1
【取り合い：あり】		8	2	10
内訳	同じものでも相手のものが良く見える	2	0	2
	わざと意地悪をしてちょっかいをかける	3	2	5
	一方はからかうため取り上げるが、もう一方は無関心	3	0	3
【無関心】 相方の移行対象には無関心		1	2	3
その他	同じもので入れ違っても気が付かない	1	0	1
	取り合いにはならないが、取られないようにしている	1	0	1
	1人が持っている自分もほしくなり、相手のものを取りあげるのではなく自分の移行対象や別なものを持ってくる	1	2	3

うに受け止め、理解しているのかについて、母親の思い（記述）を一部紹介する。

〈ケース5〉2歳1か月まで二人ともおしゃぶりを使用していたため、おしゃぶりを止めたときにネンネの毛布があったので、気持ちをそちらに移して寝るようになったので助かった。私が作ったガーゼのネンネなので、大切に使用されていることが何より嬉しい。

〈ケース8〉泣いている時に渡すと泣き止んで落ち着いてくれる。寝るときに母にべったりしなくてもよい場合があり、助かっている。困っていることは、出かける際においていくのを嫌がることもある。

〈ケース9〉やはり乳児期は母親一人に赤ん坊2人なので、甘えられる対象の代替物として「ビーボー」と「ワンワン」は必要不可欠な存在として、日々その存在感が増していった。私は「ビーボー」なしには育児ができなかったように思う。移行対象として長持ちしているのは、ウォッシュャブルであることも大きかったと思う。

〈ケース13〉主人っ子のBは主人の帰宅が遅くて私が二人を寝かし付けなければならない時、サミーには何度も助けてもらった。2歳ぐらまではよく噛んでいたのが洗濯が大変だった。何度か破れてしまって新しい物に取り替えた時はわかったらどうしようかとドキドキだった。

〈ケース16〉日々助けられている。Bのおくるみ最近まで大嫌いな病院へ行くときは必ず持っていた（あっても大泣きだがそれでも安心するアイテム）。このところ自分で「持っていない」と頑張るようになってきた。以前に比べ、日中使うことはほとんどなくなったが、おくるみ（プーちゃん）なしの生活はBにはありえない。AがBのBがAの大切なアイテムをよく知っていて、優しく渡す姿や大切に扱う姿がほほえましい。物ではあるけれど、生き物のように「あった」ではなく「いたいた」というのがおもしろいのと二人にとってはこれらのもの

も相棒のような存在のようだ。

〈ケース18〉俗語だとは思いますが滞在していた米国では移行対象の毛布を「emergency blanket」と呼んでいた。我が家での登場は帰国してからだが子どもにとっても親にとっても「なくてはならない物」であった。4歳の現在では持ち始めた頃と使用状況が異なっているが精神安定（剤）として必要であり緊急時には絶対であるので可能な限り手元に置きたい（親の依存度も相当である……）

〈ケース23〉（移行対象の）枕カバーが3枚セットだったが、噛み続けるのですぐにだめになってしまい、似たカバーを買ってきたが「違う！」と怒られてしまい、必死で同じものを探した。每晚吸うので2日目くらいにはすごい臭いになるが、私も夫もなぜかその匂いを嗅いでしまう。

以上のケースから、どの母親も子どもの「移行対象」を好意的に受け入れていることが読み取れた。反対に、「移行対象」を排除しようと働きかけていることを記述している母親は1人もいなかった。一方で同じ「移行対象」をボロボロになるまで使い続けている子どもが多く、「移行対象」を買い替えるなど交換を余儀なくされる際の困惑や心配を表現した記述もあった。いずれにしても母親の記述から「移行対象」の存在は、母親の育児負担を軽減するアイテムとなっていることが示されていた。「移行対象」は子どもが決めるため、母親にとっては何が「移行対象」になるかはわからない。「移行対象」に対する母親の必死さが垣間見え、子どもの身の回りにあるもので、選択可能で大量生産されているものが「移行対象」になってくれると、母親としてはありがたいと思えた。

富田（2007）は、移行対象・指しゃぶりへの単胎児の母親の受容と理解について次のように報告している。「移行対象」と指しゃぶりをひとまとまりにして母親に聞いているが、やめさせるか否

かについて、中間的な意見も多かったようであったが、「やめさせる方向」8%に対し、「無理にやめさせない方向」21%が最も多かったという。単胎児についても「移行対象」をめぐる母親の考え方には、子どもの精神的安心の確保と自律・自立を見守る姿勢が示されていたと言えよう。

【結論】

双生児の移行対象の特徴について、本研究では以下のことが明らかになった。

1. 双生児の移行対象の出現率は53.4%となり、単胎児の出現率31.7%（井原ら、1997）と比べて大きく上回っていた。双生児育児は単胎児育児と比べて母親の心身に負担をもたらすものであり、「移行対象」にその育児スタイルが影響を及ぼしている。自立を促す欧米の53.9%に近い値からも、1対1で母親が育児の対応をすることが難しい双生児の分離不安の防御として、双生児にとって「移行対象」が不安を軽減させる手段となっていることが示された。
2. 「移行対象」出現の有無に卵性による差は見られなかった。性差については、女兒に有意に「移行対象」が出現し、単胎児と同様の結果となった。
3. 「移行対象」の選出のきっかけについては、「寝るとき・布団代わり」が半数を占めており、寝る際の母親との距離感が関与している可能性も考えられた。また、「双生児の片方からの影響」もあり、双生児ならではの特徴ととらえることができた。
4. 「移行対象」をめぐる双生児の関係性については、取り合いの有・無の攻防の中に、互いの「移行対象」の大切さを認識している双生児が多かった。
5. 「移行対象」について、どの母親も肯定的に受け入れており、移行対象を排除しようと働きかけている母親は1人もいなかった。「移行対象」の存在は、母親の双生児育児を支える役割

を果たしていた。

本研究は、日本双生児研究学会第29回学術講演会および乳幼児保健学会第9回学術集会で発表したものに加筆したものである。

謝辞

質問紙調査にご協力くださり、貴重な体験をお知らせくださいましたツインマザーズクラブ事務局および会員の皆様には深く感謝申し上げます。また、調査分析にご協力くださいました江原沙緒理様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献・引用文献

- 遠藤利彦（1990）：移行対象の発生因的解明—移行対象と母性的関わり—、発達心理学研究、1（1）；59-69.
- 遠藤利彦（1991）：移行対象と母子間ストレス、教育心理学研究、39（3）；243-252.
- 藤井京子（1985）：移行対象の使用に関する発達の研究、教育心理学研究、33；106-114.
- 井原成男、汪玲、庄司順一（1997）：移行対象と気質の日中比較、日本教育心理学会発表論文集、（39）；170.
- 井原成男 編著（2006）：移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学、岩崎学術出版.
- 井原成男（2009）：ウィニコットと移行対象の発達心理学、福村出版.
- 池内裕美、藤原武弘（2004）：移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から、社会心理学研究、19（3）；184-194.
- 片山理恵、内藤直子（2011）：双子の子育ての疲労に関する文献検討、香川母性衛生学会誌、11（1）；13-18.
- 大木秀一（2014）：多胎妊娠の医学的知識と多胎家庭の現状に沿った支援、助産雑誌、68（4）；

290-295.

天羽千恵子 (2014) : 母親の立場から語る多胎妊娠・
出産・育児に必要な支援、助産雑誌、68 (4) ;
302-305.

富田昌平 (2007) : 乳幼児期の移行対象と指しゃぶ
りに関する調査研究、中国学園紀要、6 ; 127-
138.